

島津外交の陰に開いた医療の華

薩摩藩の

山懐に息づく



薩摩の山陰に咲く竹節人參という植物。7月ごろに赤い花を咲かせる。
【始良郡溝辺町、県立薬草の森】

胎臘薬録(たいろうやくろく)

という古い薬の本は現存していないが、その内容を忠実に伝えているといわれている「神農本草経」という本には三百六十五種の自然の薬物が載せてある。薬物は上・中・下の三つに区分され、上品⇨飲むほどに体力がつき身が軽くなる、中品⇨解熱、鎮痛など、下品⇨熱薬、冷薬、下剤など⇨と解説してある。

漢方の処方は一味だけで用いることはなく、上品と中品を混ぜて下品を少し加えるなどの工夫がなされる。古代中国人が数万年という自らの体験をつむぎ、織りなした珠玉の名品ぞろいと考えると、それに比べると、洋薬はおおかたは合成品で作用はシャープであるが、神農本草経的な

区分をすれば中品から下品になるだろう。

漢方は、一味で用いることはめったにないとい書いたが、極めてまれに一味を用いる処方がある。独参湯という。ご存じ、朝鮮人參(上品)だけを一日に八g服用する。宋代の陳自明が一二三七年に発明した薬で、約七百年間の臨床を経てきたことになる。

何に使われたかという点、「虚弱な人、発熱・悪寒時や糖尿病で口が渇く、肺結核でたんが多い、軽い脳卒中でふらつく、手足の先端から冷えてくる、難産後」など。陰虚症(弱った人)に用いる薬なので副作用はなく有効であったと考えられる。

実はこの朝鮮人參によく似た成分を持つ植物が、日本で初めて薩摩藩で発見され使用された。

寛永年間のごく初期、明末の乱を避けて中国広東省潮州から大隅内之浦に入津した一団がある。当時の内之浦は、都城領の飛び地であったため、一行は都城唐人町(現在の都城市中町)に入居した。この

中に一官何欽吉という名医がいた。彼は程なく鰐塚山系の梶山でウコギ科の竹節人參を発見。これに「和人參・薩摩人參」と命名し、領民の医療に役立てた。

三國名勝図会に「当時、土民之を知らず」とあるから、高価な人參の発見は、一大朗報であったに違いない。和人參すなわち学名竹節人參は、通常根が竹の節のように横に伸びていて、本州でも自生している。

ところが最近の研究で、南九州産は本州産と成分が違い、朝鮮人參に近い成分を持つっており、分けて考えるべきだという説が出されている。本州産は江戸時代から解熱・去たん・健胃に用いられてきた。しかし、南九州産はかぜと産後に用いられていたことが曾於郡末吉町の現地調査でわかってきている。

何欽吉一行は、初めから内之浦を目指している。従ってこの発見は、島津藩お家芸の外交政策の陰に咲いた「医療文化の華」と考えてよい。